

生（性）教育 ～いのち～

— 名古屋経済大学高蔵中学校（学校法人市邨学園） —

1 実践のねらい

- 性教育全般を通して、生命の重さと大切さに気付かせ、生徒一人ひとりの豊かな心の成長を目指すとともに、校訓の一つである「慈しみの心」をいっそう育ませる。
- 赤ちゃんと直に触れ合うことによって得られる“温かさ”と、「自分史」作成のための聞き取りによって感じられる“親の愛情”を再確認させることによって、周囲の人々と自分自身の存在の大きさを認識させ、自己肯定感を強くさせる。
- 得られた感動や確信を他者に発信させることによって、お互いを認め合う心や自信を身につけさせる。

2 実践の内容（総合的な学習の時間・・・32 時間）

（1）助産師の先生による講義・実習（5月22日・6月26日）

- 2学期にお世話になる前田助産院の前田弘子・大橋史恵の両先生による講義と実習を2回にわたって実施した。
- 講義では、精子と卵子の偶然の出会いから生まれた1億分の1の存在であることに生徒は驚いた。そうした貴重な存在は自分だけでなく隣の仲間もそうであることに気付いたようである。
- 実習では、赤ちゃんの抱き方・寝かせ方、服の着脱と体重測定の方法、おむつの交換方法などを等身大の赤ちゃん人形を使ってグループ毎に指導を受けた。男子生徒の真剣な眼差しが特に印象的であった。



（2）自分史の作成

- 1人当たり4切画用紙1枚に生い立ち(自分史)をまとめさせた。写真を貼り付けたり、色紙でちぎり絵風に仕上げたり、色鉛筆で仕上げたりといった工夫がなされており、生徒にとって大切に取り組んだことが伺われる。
- 中には、「未熟児」「吸引分娩」「帝王切開」といった言葉も見られ、陣痛の時間、名前の由来なども記されている。「感動して涙が出てきた」という親の言葉も添えられた作品など、温かい親子の会話の上で完成したからこそ丁寧な仕上がりになったと思われる。

（3）助産院訪問～赤ちゃん抱っこ体験

（9月4日・11日・18日／10月2日・23日・30日／11月6日）

- 47人の生徒を7つの班に分けて実施。前田助産院の前田先生が、当院で出産した“お母さん”に了解をとってくださり、生徒の訪問時には7～8組の母子も助産院を訪問。時には、訪問の十数時間前に生まれたばかりの赤ちゃんを抱っこさせてもらうこともあった。
- オムツの交換、着せ替え、体重測定、遊びといった体験をしながら、お母さんとの会話が弾む。出産時の苦しさや幸福感、子育ての大変さと充実感といった話に、自分と自分の母親との関係を投影しているようであった。

- 前田助産院さんのオリジナル「産道」の通過体験も貴重であった。タオル地とゴムで作られた「産道」を手を使わずに通る抜けることで赤ちゃんの自分から生まれようとする「力」「生命」の大きさを体感できるものであり、生徒たちも印象を強くした。「私はスゴイ！」
- 「赤ちゃんはとても温かかった。そしてたくさん動く。」「お母さんは大変だ。でも成長する我が子を見るのは楽しそう。」「小さくても間違いなく命がある。命が僕に迫ってきた。」生徒の感想から“大きな命”を感じとっていることが分かる。



(4) 学習活動発表会 (11月18日)

- クラス単位で全員が発表をした後、推薦で選ばれた代表班が、一連の総合学習「生(性)教育～いのち～」の発表を行った。
- 特筆すべきは、前田助産院でお世話になった赤ちゃんとお母さんが発表会に参加して下さることである。これは恒例になっており、生徒の発表に赤ちゃんの声なども重なるが生徒たちはそれを受け入れているところがすばらしい。お母さんも大変喜んで聞いてくださり、展示写真等を大切に持って帰られた点、印象的である。
- 3年生にとっては、前年度の自分たちの取り組みを思い出しながらか、あらためて「命の重み」をかみ締める機会となった。1年生は、次年度に大きく期待を膨らませている様子である。生徒たちは発表に食い入るように聞き入っており、参加した保護者からも大きく評価していただくなど、充実した発表会となった。



(5) 研究冊子づくり

- 前田先生の講義や「赤ちゃん抱っこ体験」だけでなく、自分たちで調査研究した内容も踏まえた内容で、班単位の研究冊子を作成した。
- 各自が宝物にすると同時に、前田助産院さん、お世話になったお母さんにも寄贈した。また、稚拙ながら実践例として近隣の小学校にも送付させていただいた。

3 おわりに

- 思春期に「命」を見つめ直すこうした取り組みができることは大きな意味を持つ。自己肯定感につながると同時に仲間の存在の大きさにも気付いてほしいと願う。
- 「お父さん・お母さんがいてくれて今の自分がいます。」「パパとママ、産んでくれてありがとう。」「今を大事に生きています。」という言葉を引き出せたことで本校の「生(性)教育」のねらいを達成できたと評価できる。

4 参考

- ・ 前田助産院 (ら・く・一な) 〒453-0813 名古屋市中村区二ツ橋町5-5 1-4
TEL/FAX 052-481-3025 <http://www.la-cuna.net>

“生”と“性”を考える「いのち」の学習
－ 中学校3年間を通して「生き方」について考える －
 － 犬山市立東部中学校 －

1 実践のねらい

犬山市では、平成13年に、従来からの「性の指導研究委員会」の組織を再編制し、「健康教育研究委員会」を発足させた。本校では、これを受けて、「性」の指導を人としての本質的な部分、命に関わる指導であり、中学校3年間の系統的な指導を行うことで「よりよい生き方をするための、望ましい行動選択や意志決定のできる子ども」を育成できると考え、実践を続けてきた。

2 実践の内容

(1) いのちの学習と健康ひろば

		1年生	2年生	3年生
いのちの学習 (学活)	I期	「命を大切にするためには」 (エンカウンター)	「自分らしさ」	「セルフディフェンス ～性の被害と加害～」
	II期	「エイズ感染と予防」	「エイズと共に生きる」	「今エイズは」
	III期	「私たちをとりまく性情報」 「生命誕生のすばらしさ」 講師：助産師	「思春期の恋～男女交際のあり方～」	「生命誕生～親になるために～」 協力：1歳未満児子育て中の 母子（子育て支援室）
(総学) 健康ひろば		「薬物乱用防止と セルフディフェンス」 講師：愛知県警察	「自分を大切にするために」 講師：セルフディフェンスコミュニケ ーション開発 青嶋宮央	「性と生考える」 講師：いのちと性の出前講座 「はぐ」

○ いのちの学習

自他の命を大切にし、思いやりの心を持って人と接することのできる生徒を育てる場として、各学年に年3回「いのちの学習」の時間を設定した。

授業では、エンカウンターや協同学習（学び合い）の形式を取り入れ、お互いの考えを尊重することを大切にした。

「生命誕生～親になるために～」(3年)では、各学級に赤ちゃんとそのお母さんを迎え、出産・育児体験や我が子への思い、男親からのメッセージなどを話していただいたり、赤ちゃんをだっこさせていただいたりした。生徒から、「親になるということは、子どもが好きだからという思いだけではいけないんだと思った」、「いろいろな人に支えられて生きている私たちは、親になる時にもいろいろな面で自立していけないと思った」「親になるために必要なことは、これから生活していく中でも大切なことだと思った」等々の感想が寄せられた。



いのちの学習「生命誕生～親になるために～」

○ 健康ひろば

体験を重視した活動を意図的に取り入れ、家庭や地域の中に存在価値を見いだす場として「健

「健康ひろば」を開催した。ゲストアドバイザーの活用を積極的に進めるとともに、子どもたちのニーズにあった指導内容となるように検討を重ねている。

「自分を大切にするために」（2年）では、事前に学年の実態を把握した上でワークショップに参加し、コミュニケーションの持ち方や嫌なことの断り方等を学んだ。保護者からは、「現在家庭で起きている子どもとの言葉のいさかいが、この参観で納得できた」、「子どもから相談を受けられる大人でありたい」等の感想が寄せられた。保護者にとっては親子関係を見つめ直すよい機会になった。



健康ひろば（2年）

「性と生を考える」（3年）は、いのちの学習のまとめとして実施してきた。助産師という専門的立場の人から、具体的な話や現状を聞いたり、性に関するクイズや感染の仕方を知る実験を体験したりすることで、「性と生」についてどう向き合っていくべきか、一人ひとり深く考えることができた。



（前略）よく情報が入ってくるのは、携帯や友達なので、そればかりに流されないようにしたいと思った。水の交換実験では、誰か一人が感染症にかかっていると、直接でなくても人を介して感染することがあるということがよくわかった。それと、グラフなどを見るとやっぱり男女では考え方が違うこともわかった。これからは、もっと自分のことを理解し

（2） 道徳授業

いつでも、誰でも、必要に応じた題材を選んで道徳の授業ができるように、それぞれの実践をポートフォリオし、集中管理を行っている。また、1年生においては、同じ題材を全ての学級で取り組んだり、教師が役割分担をして合同道徳を行ったりして、学年全体で実践してきたため、どの教師が1年生のどの教室に入っても道徳の授業を発展させて指導ができるようになった。



講演会

（3） 地域への発信・交流

「地域で子どもを育てる」、「学校の取組を知ってもらおう」という考えのもと、学校日より「ふれあい」を地域の家庭に回覧してきた。

今年度は、学校公開日に、学校・家庭・地域で考える機会にしたいと講演会を企画し、案内を校区の小学校に配布したり、学校日よりを校区内全戸に配布し参観者を募った。その結果、少数ではあったが本校保護者以外の参観もあった。

3 おわりに

社会のニーズを考えながら、発達段階に応じた指導を、系統立てて行っていくことで、命の大切さについて考えることができてきた。今後は、小学校との連携、地域との交流をさらにすすめながら、「生き方」について考え、精一杯生きていこうとする子どもたちを育てていきたい。

命を大切にし、豊かな心と思いやりの心に満ちた生徒の育成

—— 体験学習・講演会・栽培等各種の実践を通して ——

— 豊山町立豊山中学校 —

1 実践のねらい

- 本校では、重点目標のひとつとして「教育活動全体を通して、道徳教育の充実を図り、豊かな心と思いやりの心に満ちた生徒の育成に努める」と掲げ、実践に取り組んできた。

2 実践の内容

(1) 道徳の授業実践

- 4月21日(月)の道徳の授業公開は、1年生「人間愛、感謝、思いやり」、2年生「生命の尊重」、3年生「目標の実現、希望と勇気、強い意志」の内容項目で実施した。
- 10月9日(木)の学校訪問における道徳の特設授業(1年)では、主題を「今を大切に生きる」として実践した。

(2) 喫煙防止教室(1年)「聞いてびっくり たばこの真実」9月29日(月)

- 1年生とその保護者を対象に、呼吸器科医師を講師に招いて実施した。喫煙による体への悪影響だけではなく、なぜ喫煙したくなるのか、喫煙者の心理を考えさせ、喫煙しないことが大切であるという内容の講話をしていただいた。生徒の感想には「たばこの怖さを改めて知った。喫煙している親が心配。今日聞いたことを話してやめてほしい」等とあり、自他の生命の尊重に気付きはじめたようである。



(3) 生と性に関する教室(3年)「一人しかいない自分」10月27日(月)

- 3年生とその保護者を対象に、養護教諭が企画した。講師には、性を医学的・科学的な側面だけでなく、もっと心理面に迫る話をしていただける方と考え、性教育団体所長を招いて実施した。内容はやや難しいかとも思われたが、生徒の感想には「命は何よりも尊く、何かと比べても比べきれないくらいの価値があることを知った」等とあり、「生命」「男女」「性」「いじめ」「人との関わり」など多くのことを学んだようである。



(4) 命を大切にできる心を育む教育講演会（全学年）「お互いの想いを尊重する親子関係のあり方ー思春期をどのように過ごすかー」 11月13日（木）

- 全校の生徒と保護者を対象に、臨床心理士である大学教授を講師に招いて実施した。はじめに、保健委員会（生徒）が、「健康に関する意識調査」の結果を発表し、講演につなげた。生徒の感想には「保健委員会の発表を、みんなはこう思っているんだなあ、と考えながら聞いていた」「周りの人をもっと大切にしようと思った」等であった。



(5) 薬物乱用防止教室（2年）「Stop The Drug No!と言える勇気を持って」 11月17日（月）

- 2年生とその保護者を対象に、警察署員を講師に招いて実施した。生徒の感想には「日本人が薬物を作ったことを初めて知った。悪意があったわけではないので残念だ」「薬物を周囲の人に使ってほしくない」等とあり、薬物の怖さだけでなく、周囲への心配りも学んだようである。



(6) 福祉実践教室（1年） 12月3日（水）

- 1年生を対象に障害者や高齢者を講師として招き実施した。体験の前に「私たち障害者の願い」というテーマで、地域の全盲の女性から講話があり、その後、車いすや手話などの体験する中で福祉に対する理解を深めた。生徒一人ひとりが福祉のあり方や自分にもできるボランティア活動について真剣に考えるよい機会となった。



(7) 栽培活動（特別支援学級・園芸委員会）

- 現在、特別支援学級に1名の生徒が在籍し、季節に合わせた野菜（ミニトマト・なす・さつまいも）を作り、その野菜で調理実習も行った。また、園芸委員会による植樹活動、一人一鉢運動を行った。

3 おわりに

- 生徒は、数々の講演や授業、体験を通して自分だけでなく他者の命の大切さを学び、また、周りを思いやる心も育んだようである。今後は、これらの気持ちを大切に、学んだことを日常生活の中でも生かせるよう指導を続けていきたい。

自他の生命の尊さを知り、心豊かによりよく生きる生徒の育成

— 春日町立春日中学校 —

1 実践のねらい

- 生命の尊さについて理解させる。
- 他の人々との好ましい人間関係を築き、ともに生きることの大切さを学ばせる。
- 自信と夢をもって生きることの大切さを理解させる。

2 実践の内容

(1) 誕生の喜びを知り、科学的な知識を身に付けるとともに、生命の大切さを理解する活動

○ 思春期教室

10月1日(水)に3年生を対象に、あいち思春期保健研究会の助産師を講師に招いて行った。「思春期の性」に関する話を聞き、また、教師と助産師とで行う「お産劇」を見ることによって生命の尊さや異性を思いやる心の大切さを学んだ。男子も女子も真剣な表情で参加していた。



○ 薬物乱用防止教室

11月6日(木)に3年生を対象に、愛知県警察本部から講師を招いて行った。覚醒剤等の薬物乱用の現状、薬物が及ぼす身体や社会への悪影響についての話を聞いた。生徒たちは薬物の標本を実際に見て、種類の多さに驚いていた。また、薬物乱用者となるまでの生活の状況や家族の悲しさなどについて具体的な例を聞くことができ、薬物の恐ろしさを痛感した様子が見られた。将来、そのような誘惑を受けたときの歯止めになることが期待できる。



○ 救急法教室

11月12日(水)、2年生を対象に西春日井広域事務組合消防本部より、救命救急士を招き「救急法教室」を開催した。講座の内容は「人工呼吸法」・「心臓マッサージ」の基礎知識と実習訓練、AEDの使用方法である。2年生の保健体育科の授業で心肺蘇生法は「応急手当」の単元で取り上げられている内容である。この講座を受講することによって、知識だけでなく実習を通して心肺蘇生法が体験できたことは大変有意義であった。人命救助に対しての使命感と命の大切さを再確認するすよい機会になった。



○ 栄養指導教室

11月に3回、1年生が町の栄養士を招いて総合的な学習の時間を使って栄養について学習した。最初の授業では、ハンバーグやフライドチキン、ポテトチップスから脂肪を取り出す実験を行った。また、様々な清涼飲料水に含まれる砂糖と同量の砂糖を測り取って水に溶かし、実際に

飲み比べてみた。生徒の好きな食べ物にいかにも多くの脂肪や砂糖が使われているかを見てとることができた。2時間目の授業では、栄養の取り方と成人病の関係をわかりやすく説明してもらい、きちんとした食生活の大切さを知った。3時間目の授業では、給食の残飯の多さを給食委員が調べて発表し、栄養士から給食をきちんと食べることから1日の栄養バランスが保たれることを聞いた。3時間の授業の後、給食の残飯はほとんどなくなり、健全な食生活が健康な体を作るという意識が高まった。また、朝食を食べない生徒も減ってきた。



(2) 一生懸命に生きることの大切さや生命の尊さについて学ぶ活動

○ 命を大切にすることを育む映画鑑賞会

7月2日(水)、全校生徒が映画「Life天国で君に逢えたら」を鑑賞した。これは実話に基づいた映画である。死を目前にしても尚、ひたすら前向きに生きてプロウインドサーファー飯島夏樹と家族の心の交流は、真実の物語だけがもつゆるぎない感動と力強いメッセージに溢れている。1年生女子の感想には「今回の映画鑑賞会では、命の大切さがとてもよく伝わりました。一度しかない命。短い命。そんな命だからこそ、大切に生きていかななくてはならない、ということに改めて考えさせられた映画でした。このような映画鑑賞会をすることで、普段余り考えない命の大切さを考える機会になったと思います。」とあった。

○ 講演会

11月14日(金)、全校生徒を対象に「懸命に生きる人々～日本人こそ学んで欲しい～」という演題で講演会を行った。講師はNPO法人アジアチャイルドサポート代表理事の池間哲郎氏で、アジアのゴミ捨て場やスラム街など極端な貧困地域の調査・撮影を行い、そこで出会った人々の過酷な現状とその中でも明るく懸命に生きる子ども達の姿を、自ら撮影したビデオや写真を使って講演していただいた。懸命に生きることの大切さ、命の尊さ、愛することの大切さを日本人こそアジアの子ども達から学んで欲しいという強烈なメッセージがこめられていた。3年生女子の感想には「アジア諸国の過酷な現状とその中で一生懸命に生きている子ども達の姿に私自身ショックを覚えました。平和で豊かな日本に生きていることの有り難さを痛感すると同時に、貧困の中でも『懸命に生きることの大切さ』『命の尊さ』『愛することの大切さ』など、私たち日本人が失いかけているものを見つめ直すことができました。」とあった。



3 おわりに

- 道徳の授業や健康に関する学習、映画鑑賞会、講演会等を通して、生徒達は自他の命の尊さを知り、かけがえのない命を大切にしていかなければならないことを実感し、よりよく生きることの大切さを再確認することができた。
- 今後も教育活動の中に、命の大切さに関する活動を計画的に継続していく必要があることを職員間で共通理解を図った。

命を大切にし、他を思いやることができる 生徒の育成をめざして

— 大町立大町中学校 —

1 実践のねらい

- 今を心豊かにたくましく生きている人の生きざまにふれることを通して、かけがえのない命を大切にしようとする気持ちを高める。
- 地域の施設や園でのボランティア活動を通して、他を思いやる気持ちを高める。
- 各教科、道徳、学級活動や総合的な学習で命に関する内容を扱い、系統的な学習を展開する中で、自他の命について、より深く考える。

2 実践の内容

(1) 学校保健委員会（10月14日）

- 「人々を救ったのは、人の心〜大震災を乗り越えた、生徒・親・先生たち」をテーマに、講師に元神戸市立鷹取中学校長の近藤豊宣先生を招き、全校生徒で講演を聞いた。阪神大震災直後から、中学校が避難所となり、組織的な支援が入るまでの19日間、自らも被災者である教職員や生徒たちが中心となって不眠不休の支援活動が行われた。そこで起こった様々な出来事や経験に基づいた話は、心に強く響くものがあり、人が生きていく上で大切なことについて学ぶことができた。そして、自分自身を振り返り、これからの生き方を考える機会となった。



(2) 2年 自然教室「命をいただく活動」、「親への手紙」（10月20日～22日）

- 「命をいただく活動」では、実際に漁で使っている漁船で移動し、自分で鯛を釣って、自分でさばいて、その魚を食べるといった体験をした。自然教室後のアンケートでも、最も思い出に残る活動の一つに上げられ、「命」に向き合い、「命」について考える貴重な体験となったようである。



「親への手紙」では、まず、事前に保護者に、自分が生まれたときの様子や気持ち、どのような想いで育ててきたかなどを手紙に書いていただくようお願いし、生徒には知らせないで準備を進めた。自然教室2日目の夜、担任から「親からの手紙」を受け取って読んでいるときの生徒の反応は様々であったが、中には涙を流しながら読んでいる生徒も見られた。日頃は、忙しい生活に追われ、親との関わりや思いをなかなか感じ取ることが難しいが、自分のことをいつも真剣に考えていてくれることに気づき、感謝の気持ちをもつことができたと思う。そして、普段、口に出してはなかなか言えない思いを手紙に書いて、その地から投函した。

(3) 2年 総合的な学習「命について考えよう」

- 2年生では、道徳や学活を含めての一連の命についての学習を受けて、改めて命について考える機会を設定した。まず初めに、命についての情報を得るために、「命と関わっている人の話を聞く会」(11月11日)を企画し、助産師、救急救命士、葬儀社経営者の3名の方を講師として招き、話をしていただいた。そして、今まで行ってきた命と関わっている活動を振り返り、「命」という言葉からイメージを膨らませ、自分が印象に残った言葉をきっかけに、命と関わっている人や事柄について課題を決め、本、インターネットなどを通して調べることで、「命」とは何かを深く考えさせた。



<命と関わっている人の話を聞く会 生徒の感想>

どの先生も素晴らしいお話ばかりで、勉強になりました。特に私の心に残ったのは、葬儀社の方のお話でした。「病氣と闘って亡くなってしまった人は穏やかな顔をしています。でも、自殺などで亡くなってしまった人は、苦しそうな顔をしています。」という言葉に、なるほどと、とても分かる気がしました。また、「これからの人生、何があるか分からないけれど、今を精一杯生きて下さい。」という言葉をおぼれずに生きていきたいです。

(4) 人権教育講演会 (1月19日)



- 事故で両足を失い、義足の生活を余儀なくされたにもかかわらず、不屈の精神で自分の人生を切り開いている沖縄県出身の島袋勉氏を講師に迎え、全校で講演を聞いた。会社の社長を務めるかたわら、世界各地のフルマラソンに出場し、見事完走を果たしたときの映像は、心に迫るものがあった。また、実際に義足で体育館を走っていただき、生徒の心に大きな勇気を与えていただいた。

<生徒の感想>

世の中には、こんなに強く生きている人がいるのだなと思いました。体育館を一周するときも、松葉杖を使って一周するものだと思っていたら、島袋さんは杖なしで、しかも走っていました。そのスピードはとても速かったので、それを見て努力次第で、あんなに動くことができるのだなと思いました。僕も島袋さんを見習って、何事もあきらめないで努力したいと思います。

3 おわりに

- 道徳や学級活動の授業や講演会などの行事を重ねていくたびに、生徒がかけがえのない命を大切にしていこうという思いを強くしていることを実感した。しかし、頭の中でわかっていても、まだ、普段の行動に反映されているとは言い難い。

「命を大切にする」ということは、人としての生き方にも関わっており、今、最も力を注がなければならない必要性を感じる。実際、様々な実践の取り組みに、大変意義を感じながら進めることができた。また、これからも継続して行い、自他ともに大切にすることが出来る生徒を育てていきたい。

共に学び、考え、高め合う生徒の育成

— 扶桑町立扶桑中学校 —

1 実践のねらい

- 心情を豊かにし、思いやりの心や物を大切にする心の育成に努める。
- 地域の人々との交流を図り、ふれあい活動を通して地域社会の一員としての自覚を高める。

2 実践の内容

(1) 命を大切にする月間

- 10月～11月を「命を大切にする月間」として位置づけ、「誕生」、「死」、「現在」そして「未来」について、保護者を巻き込み様々な角度から実践を進めた。

- ・「かけがえない生命」の主題で全校一斉道徳に取り組んだ。資料として「生命誕生」のVTRや事前に保護者から寄せられた誕生時のエピソードを用いた。受精卵が成長し、一人の人間に至るまでの神秘的な過程やエピソードを知る中で、自他の命の重さについて真剣に考えようとする気持ちを高めることを願った。(10月)

- ・命をバトンタッチする会代表：鈴木中人氏を招き、「いのちの授業～いのちのバトンタッチ～」を実施した。命と家族の絆を目の当たりにした保護者からは、以下のような感想が寄せられた。(10月21日)

- ・家族で寄り添う大切さが分かりました。そして、「生きる」ということの意味を考えさせられました。日々生懸命生き抜く気持ちを持ち続けたいと思います。(3年生)
- ・子供と一緒に話を聞くことができたことに感謝しました。「命の大切さ」「生きることの重み」を子供と一緒に話したいと思います。(1年生)

- ・文化祭に全盲のヴァイオリニスト：穴澤雄介氏を招き、ジャズやオリジナル曲のコンサートを実施した。美しい旋律と氏の「マイナスをプラスに変える」という考えに触れ、今を懸命に生きる姿を学んだ。(11月8日)



〈穴澤雄介ミニコンサート〉

- ・12月に行われる合唱コンクールに向け、各学級が歌う自由曲の歌詞に込められた作者の思いを知り、自らが目指す姿を話し合う道徳の授業を実践した。音楽科の協力で各学級別の自作ワークシートを用いた。

・各委員会はこの月間に多くの取組を行い、命の大切さを考えた。

図書委員会……「命を考える本」の紹介、展示 文化委員会……ポスター作成、掲示
美化委員会……校内美化の呼びかけ 給食委員会……残菜なくそうキャンペーンの実施

(2) 地域との触れ合いのための活動

○ 町民体育祭、町民まつりなどの町主催事業をはじめとするボランティア活動に積極的に取り組むようにしている。本年度より、学校周辺の公園の清掃活動や通学路のゴミゼロ運動をスタートした。新たな取組に地域の方から、感謝の言葉をいただいている。活動時には、本年度制作したスタッフジャンパーを着用して、意識の高揚を図っている。



〈町民まつりボランティア〉

(3) 花いっぱい運動

○ 春のパンジーから始まり、マリーゴールド、サルビア、ひまわり等々。環境委員会が中心になって種から育てている。学校中に花が溢れ、潤いのある環境づくりがなされる。新入生は春のパンジーに思わず「きれい。」と声をあげ、中学校での3年間をスタートした。



〈花の植え替え作業〉

(4) 保育園交流活動

○ 年に2回、校区の保育園と交流をしている。園児との触れ合いの中から、今の自分を見つめ、命の大切さを再認識することにつながっている。第1回は、保育園に出かけ、自分たちで考えた「輪投げ」、「宝探し」などの遊びを通して触れ合った。第2回は、学校に招待し、園児とともに凧上げを行った後、手作りの絵本を通して読み聞かせを行い、交流を深めた。



〈保育園でのふれあい〉

3 おわりに

○ 他者とのかかわりが希薄である。一步踏み込んで触れ合うことができない。昨年度の反省から、互いのよさを認め合い、高め合うことのできる集団を形成したいと考え、道徳の実践を中心に据えながら進めてきた。他者の命も大切にしようという思いを多くの生徒がもつことができた。合唱コンクールは例年以上に盛り上がりを見せ、すばらしい歌声が響いた。無作為の100名に調査した結果、97名の生徒が「学校は楽しい」と答えている。思いやりの心が溢れ、誰もが生き生きと生活する学校をめざし、実践を深めていきたい。

豊かな人間性を育み、命を大切にする生徒の育成

— 七宝町立七宝中学校 —

1 実践のねらい

- かけがえのない自分の存在について考える機会を設けることで、一人一人が自分を見つめながら主体的に自分らしく生き抜こうとする心を育てる。
- 自他の命の大切さを考えさせたり、物を大切にする気持ちや奉仕的な精神を育てる活動に取り組みせたりすることで、自他を理解し、思いやり、共感し合う姿勢を養う。

2 実践の内容

(1) 自他の命を大切にする心を育む活動

- HHT(ハートヘルスタイム)①<7/4(金)>DVD「ヒロシマ・ナガサキ」鑑賞(ステイヴン・アカハネ監督作品)
平成になり20年という節目に、昭和20年夏の広島・長崎の原爆被害者14名の体験談や原爆投下関係者の証言などを通し、平和の大切さや命の大切さを考えさせた。

この戦争で失ったものはたくさんあるけれど、得たものは何もないと思います。だからこそ、そのことを忘れずに、もう一生戦争なんてしないということが大切です。しかし、未だに戦争をしている国があるというのが現状です。罪のない命が次々なくなっていくし、街も壊れるし、いいことなんてないはずなのに、早く戦争のない平和な世界を実現してほしいと思います。(生徒感想文)

- HHT(ハートヘルスタイム)②<10/31(金)>濱宮郷詞氏(車椅子の熱風講師)の講演
濱宮さんを迎え、「困難を乗り越え強く生きる」～人と人助け合う心人間として最も大切なこと～というテーマで、幼い頃の父親の死、母子家庭で必死に働く母の姿、高校時代の栄光と挫折(怪我による車椅子生活)、その後のリハビリ生活、障害者としての結婚や父親に至るまでの生活などの長く辛い道筋を、熱く、明るく、爽やかに語る講演であった。濱宮さんの前向きで、常に希望をもって生きていこうとする姿は、悩みを抱えながら成長していく過程にある生徒たちの心に強く響いたようであった。



熱く語りかける濱宮さん

- 障害のある方と私たちは同じであり、障害のある方に少しのハンディがあるだけだということが分かりました。そして、いつかその差を埋めることができる人間になりたいと思います。
- 「人は生まれてきてこそ生きる価値がある」「自分に負けない」この言葉がとても心に残っています。今までの講演の中で、一番勇気を与えてくれた人です。(生徒感想文)

- HHT(ハートヘルスタイム)③<11/28日(金)>命の集会～AIDSについて考える～
今回は、12月1日の「世界エイズデー」にあわせて、エイズという病気やその現状についての正しい知識を得ることと、それを通して「自分の命」「他人の命」「人に対する思いやり」を考える場とすることを目的として実施した。
保健委員会の劇、エイズについてのアンケート結果などをもとに、町保健センターの



命の集会(エイズを考える)

保健師さんを講師に迎え、クイズを交えたお話をしていただいた。命の尊さや差別・偏見の問題、レッドリボンの意味などエイズについて、全校生徒に考えさせる活動となった。

こうした集会を通して、生徒が命の大切さや人権について考え発表する機会を設け、自分や他人の命を大切にするとともに思いやりの心を育てていく一助にしていきたい。

- HHT(ハートヘルスタイム)④<2/27(金)>^{おおむねこうすけ}大棟耕介氏(ホスピタルクラウンK)講演
プロの道化師(クラウン)として、病気の子どもたちを元気づける(ホスピタルクラウン)として活動している大棟さんを迎えての講演会。闘病中の子どもたちと接するなかで、その場を読み取り、自分も楽しみながら子どもたちに笑いを届ける。そんな脇役としての充実感を語っていただいた。生徒たちも生命力の偉大さを痛感したようであった。
- 福祉実践教室<10/30(木)>



車椅子でバスケ体験

1年生を対象に、14名の講師の方々を招き、車椅子、手話、要約筆記、点字、視覚障害者ガイドヘルプの五つの教室に分かれ行った。初めは興味本位で話を聞いていた生徒も、講師の方の真剣で温かいお話や指導に触れて、少しずつ表情が変化し、障害者の方の体験談に熱心に聞き入る姿や自分にできることはないか考え込む姿も見られた。思いやりや福祉について考える良い機会となった。

(2) 物を大切にする心や奉仕的な心を育む活動

- リサイクルプロジェクト(リプロ)の実施
毎月1回(0の日)に朝の部活動をなくし、ボランティア委員会が中心となり、自宅にある資源ごみを回収する活動を行っている。その収益金で社会福祉協議会に今年は2台の車椅子を寄贈した。平成11年度からの活動で、これまでに寄贈した車椅子は合計24台となった。家庭や地域と連携した取り組みが、息の長い意義ある活動となっている。
- ビューティフルタウンプロジェクト(BTP)の実施
奉仕活動として年2回行っている清掃活動であるが、5月30日(金)に本年度第1回目のBTPを実施した。3年生とPTAの校外指導委員会の方は役場周辺の清掃活動に、1・2年生は学校内外の除草、清掃活動に取り組んだ。奉仕の気持ちを育むこの活動もしっかり定着してきており、自分が担当した場所が見違えるようにきれいになって、喜ぶ生徒の姿が多く見られた。



車椅子を贈呈する代表生徒



地域清掃に励む生徒たち

3 おわりに

本校はこれまで取り組んできた活動を通して、生徒一人一人の良さを認め、協力し合うことの大切さなど心の育成に努めてきた。今後も生徒たちの心情に訴えかける活動を進めることにより、より一層「命を尊ぶ」実践力を高めていきたい。

一人一人の「いのち」輝く豊かな学びの場の創造

— 南知多町立豊浜中学校 —

1 実践のねらい

- 著しい過疎化、高齢化が進む豊浜の町で、生徒が元気、学校が元気であることは、地域住民の願いである。高齢者の福祉を学ぶとともに、地域社会の担い手としての自覚をもち、命を尊び、自他の生き方を認め合う活力に満ちた生徒を育む。
- 地域の人々と共に勤労奉仕する体験や、幼児、高齢者、障害のある人々との交流を通して、社会の一員としての自覚を深め、人間尊重の精神に立って社会の中で共に生きようとする豊かな人間性を培う。

2 実践の内容

(1) 町内美化活動

- 学校と地域住民が協力し、夏季休業中を中心に校区内美化活動を一斉に実施した。全校生徒、保護者、地域の方々と教職員が各通学団に分かれて町の環境美化に一汗流した。地域に出て、人々とふれ合いながら、道路、公園、寺社、海岸、港など、自分たちの住む町のゴミ拾いや草取りなどに精を出すことで、勤労・奉仕の喜びや郷土を愛する心を培うことができた。



(2) 社会福祉施設等での交流

- 夏季休業中に、町の社会福祉協議会と連携し、ボランティア委員会が中心となり、町内の養護老人施設や授産所等を訪問し、昼食や菓子作り、レクリエーションや夏祭りの手伝いなどを体験した。その体験をまとめ豊浜中フェスティバルで報告した。さらに、11月には、2年生が総合的な学習として、全員で特別養護老人ホームを訪問し、生徒自作のパズルや折り紙で遊んだりしてお年寄りと一緒に楽しいひとときを過ごした。老人や障害のある方とかわる実践的・体験的な活動を通して、それらの人々の生活に関心をもち、身近な存在として受け止め、生命の尊さや若い生命を育むことの大切さを知ることができた。



(3) 命の大切さを伝える講演会

- 生徒・保護者・教職員を対象に、11月8日(土)車椅子の生活の中、15歳で起業した「家本賢太郎」氏の講演会を開催した。生きることの意味や「いのち」の輝きを実感させてくれる内容であった。奇跡の人に直接接することで、人間のすばらしさや生きることのすばらしさの理解を深めることができた。



- 自閉症の子をもつ親として、発達障害等の理解啓発に尽力してみえる「山本浩人」氏の講演を1・2年生を対象として行った。自閉症の子どもがどんな状況におかれているのか。実演やゲームを交えながら分かりやすく説明され、障害のある人に対する理解を深めた。人と人の関わりについて考えるよいきっかけになった。



- PTA会長の推薦する講師の「榊原英治」氏（豊浜中卒業生）による「いのち」や「生き方」をテーマにした講演を行った。豊浜で生まれ育ち、金融機関の管理職として、今もこの地方を中心に活躍されてみえる先輩の話聞くことで、郷土を中心に生きることの大切さを考えることができた。

(4) 発達障害のある生徒への対応

- 現職教育研修として、岐阜大学准教授の「橋本 治」氏を講師に招いて職員研修を行った。「発達障害のある児童生徒への対応と支援のあり方や考え方」や「不登校傾向のある児童生徒や家族への支援のあり方や考え方」などについて、本校の事例を示し、現場に即した対応や支援の仕方について適切なアドバイスをいただきながら研修した。発達障害や不登校傾向のある生徒の理解を深めることができた。

(5) 食育を核とした健康教育指導

- 特別活動の年間計画に全学年で食育指導を取り入れた。保健主事、学校栄養職員、養護教諭、学級担任を中心に、保健指導部で指導案の検討を行い実施した。各学年でアンケート調査し、実態に即して行った。食と健康や学習の関係について理解を深めた。

3 おわりに

- 豊かな体験に根ざした実践を重ねることで、自他の生命を尊重し、大切にしようとする心が育ち、様々な環境の中で生きている人々を知り、ふれ合いながら、共に社会で役立つことをなす喜びを味わうことができてきた。今後も、こうした活動を教育課程にしっかり位置付け、継続的・系統的に実践していきたい。

「いのち」を見つめ、自他を認め合いながら生きる児童生徒の育成

— 武豊町立富貴中学校・衣浦小学校・富貴小学校 —

1 実践のねらい

- 武豊町で取り組む「いのちの教育」の推進を図るため、命の大切さを学ぶ豊かな体験的な活動の場を設け、小中学校が共通認識とともに各校の実態に応じた実践を推進する。
- 「いのちの教育」について、小中学校がより連携を深めた取組をすることで、児童生徒および教師・保護者・地域の願いを具現化した実践を推進し、その定着を図る。

2 実践の内容

(1) 道徳授業公開（富貴中校区3校）

- 各校の授業参観・学校公開日の中で「道徳」の授業公開を位置づけ、各児童生徒の実態に即して「いのち」をテーマとした内容を実践した。
- 中学校はそれ以後、教室内の背面掲示に「道徳コーナー」を設け、一人一人の毎時の道徳プリントに担任が朱書きしたものを掲示し、学びの累積を図っている。

(2) 「いのちの教育」講演会（富貴中校区3校） ～いのちのバトンタッチ～

- PTA家庭教育学級ともタイアップし、いのちをバトンタッチする会の代表鈴木中人氏を招き、町民会館を会場に全校生徒と保護者、教師が参加する講演会を開催した。幼い愛娘を小児ガンでなくした経験を紹介しながら、命の大切さを訴える内容に、多くの参加者が涙し、自他の命について見つめ直す機会となった。
- 当講演は、富貴中学校区の富貴小学校、衣浦小学校にも開催をよびかけ、各校体育館で多くの保護者を交えて小学生向けの講演を実施し、改めて命の尊さを親子で実感する機会となった。



各校で講演会を開催

(3) 「いのちのコーナー」の設置（富貴中）と人権週間の取組（富貴中校区3校）

- 図書館内に新たに「いのちのコーナー」を設置、教師の推薦本を含め新たに図書を購入し、環境作りに努め、10月図書委員会が中心になって計画した「読書週間」においても紹介した。
- 11月末～12月上旬にかけて人権週間を設け、習字や標語の作品応募を全校で行うことで、人権を見つめ直す機会とした。



図書館内に「いのちのコーナー」を新設

(4) 保育園実習（富貴中2・3年生）

- 2、3年生が本校に隣接する東大高保育園において、家庭科の学習の一貫で保育実習を行っている。自分で選んだ本の読み聞かせや園庭でのふれあい遊びなど、保育園児にも喜ばれる充実した時間をもつことができた。少子化、核家族化で年の離れた兄弟をもつ生徒が少ないためより価値ある体験となっている。



園児の目線で語る生徒

(5) 父母学級・学校保健委員会（富貴中）

- 父母学級の日程の中で、「ネット犯罪対策教室」と題して、愛知県警サイバー犯罪対策室より講師を招き、講演会を設定した。全校生徒と200名を越える保護者が参加し、「ネット犯罪」について事例を交えながら説明を聞き、ネット犯罪の恐ろしさと人権の大切さを学んだ。
- 学校保健委員会は、全校生徒と保護者が参加し、「この一年でケータイへの意識がどう変わったか？」をテーマに開催した。保健委員会による生徒アンケート調査結果の発表後、東映製作の映画「ケータイ・パソコン その使い方大丈夫？」を視聴した。生徒が自らの問題として、便利さの陰に潜む様々な危険性について考え、家族でルールを決める動きにつながった。

(6) モンゴル音楽鑑賞会（富貴中）

- 学校祭のプログラムの中で、情意（こころ）を育む活動として、町民会館を会場にモンゴル出身の歌手でストリートチルドレンの支援活動を行っているオユンナさんとモンゴル楽器の演奏家を招き、音楽鑑賞会を開催した。オユンナさんの優しい人柄が伝わる語りや歌、演奏にふれ、文化の壁を越えた人としてのつながりを感じることができた。



オユンナさんのやさしい語り

3 おわりに

- 町をあげての取組である「いのちの教育」は、今後も継続される。「エイズ」「いじめ」「携帯電話」など、子どもたちの実態やその時の取り巻く社会環境を把握し、小中など学校間の連携もさらに深めながら、新たな課題に取り組んでいきたい。

4 参考

図書) 「いのちのバトンタッチ」 鈴木中人著 致知出版社

講師) 「いのちをバトンタッチする会」 代表 鈴木中人氏

事務局：名古屋市中村区名駅南2-7-2 東海医療科学専門学校内 TEL・FAX (052) 581-8686

会場) 武豊町民会館（ゆめたろうプラザ）輝きホール（678席）

場所：知多郡武豊町字大門田11 TEL(0569)74-1211 FAX(0569)74-1227